

P2-028

保育所看護師の職務満足度の影響要因

大坪 美由紀、鈴木 智恵子、佐藤 珠美

佐賀大学 医学部 看護学科

【目的】

保育所看護師の職務満足度の影響要因を明らかにする。

【方法】

北部九州3県の保育所看護師を対象とし、郵送調査を実施した。撫養らが開発した職務満足度28項目を保育所に修正し、因子分析後に抽出された25項目（1～5点、計25～125点）の総得点を従属変数とした。保健活動の自信18項目の程度（1～5点、総得点18～90点）、年間研修会参加数、勤務施設概要、年齢や保育所年数、保健活動の実施、保健活動の自信、研修会の有無、勤務施設の概要、属性を独立変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。解析はSPSS ver23.0を使用した。

【倫理的配慮】

本研究は、佐賀大学倫理委員会の承認（番号:28-24）を得て実施した。尺度使用は開発者及び保育協会に許可を得た。

【結果】

661名に依頼し318名から回答を得て（回収率48.1%）、有効回答は306名であった（有効回答率46.2%）。平均47.1歳、平均保育所勤務5.6年であった。職務満足度の25項目の総得点は、37点～287点で、平均値 3.48 ± 1.39 であった。職務満足度には感染症の対応への自信（ $\beta = .58, p < 0.01$ ）、地域子育て実施（ $\beta = .56, p < 0.01$ ）、外科経験（ $\beta = .48, p < 0.01$ ）、地域子育て支援の自信（ $\beta = -.48, p < 0.01$ ）看護師（ $\beta = .45, p < 0.01$ ）、地域子育て支援実施施設（ $\beta = -.33, p < 0.01$ ）、被虐待児への対応の自信（ $\beta = .31, p < 0.05$ ）、障がい児保育の実施施設（ $\beta = -.27, p < 0.05$ ）、延長保育の実施施設（ $\beta = -.25, p < 0.05$ ）、看護師複数配置（ $\beta = .24, p < 0.05$ ）が影響を与えていた（ $R^2 = .61$ ）。地域子育ての自信が低い人は高い人に比べて、地域子育て支援の経験が無かった（t検定, $p < 0.01$ ）。

【考察】

保育所看護師の職務満足度を高める要因は、感染症や被虐待児の対応への自信、地域子育て支援の実施、外科経験と看護師資格、看護師の複数配置であった。これらの充実を図ることで今後満足度をさらに高めることができると考える。一方で、満足度を低める要因に、地域子育て支援の実施施設、地域子育て支援の自信、延長保育や障がい児保育が影響していた。今後、地域子育て支援の研修を通じて、その自信を高めることが必要である。また、延長保育や障がい児保育、地域子育て支援のサービスが業務負担に繋がっている可能性がある。そのため、複数配置や管理者からの支援が必要である。また、外科経験が無い人や准看護師に対する研修会の充実を図ることが必要である。

P2-029

保育所等の保育士・看護師に対する緊急時の対応技術習得のための段階的研修の効果

松本 祐佳里¹、塚原 ひとみ¹、宮城 由美子¹、
小柳 康子¹、佐久間 良子¹、古賀 綾¹、
藤田 めぐみ²

¹福岡大学 医学部 看護学科

²福岡大学病院 看護部

【目的】

保育所等の保育士や看護師を対象とした緊急時の対応技術習得のための段階的研修を展開し、研修終了後にアンケート調査を行い、研修の効果を明らかにすることを目的とする。ここでは、シミュレーション研修である実践編・振り返り研修の結果について報告する。

【方法】

A市内の保育所等に勤務する保育士および看護師に対し、講義形式の基礎編の受講修了者に対し、「けいれん発生時の対応」のシミュレーション研修（実践編、振り返り）を行った。研修終了後、研修の効果やニーズを把握するため、先行研究を参考に研究者独自で作成した質問紙を用いた調査を行った。アンケートの結果は、基礎編、実践編、振り返り研修終了後に比較検討した。

【倫理的配慮】

本研究は福岡大学医の倫理委員会の承認を得て実施した。（承認番号；2018M077）

【結果】

実践編研修の参加者は75名、振り返り研修の参加者は30名であった。「けいれん時の対応ができる」では基礎編後は「とても・まあそうだ」の回答した者は31.5%、実践編後は41.0%、振り返りでは62.0%と、けいれん時の対応ができると回答した者が増えていた。しかし、「緊急時落ち着いて対応することができる」の問いには、基礎編後は「とても・まあそうだ」と回答した者は41.6%、実践編後は26.6%、振り返りでは24.1%であった。研修内のデブリーフィングでは、「子どもから目が離せないの、他のこと（指示など）ができなかった」「実際にやろうとすると緊張してうまくできない」などけいれん時の対応はできるものの、実際には思うように動けないことを実感していた。

【考察】

本研修によって、講義で得た知識を、シミュレーションすることによって具体的に経験し、その経験を自施設に置き換えて想像し、改めて振り返ることで知識と技術が統合していた。しかし、実際にけいれん時の状況を体験することによって、思った以上に対応できないことも実感しており、経験を交えたシミュレーション研修の必要性が示唆された。保育と医療職が連携して研修の機会を持つことによって、保育士は医療的な知識・技術の向上を図るとともに、医療職は保育の現場での問題点や保育ならではの工夫点を知り、相互作用によって子どもたちの養育環境を整えていくことにつながるといえる。